

オモトツタのニケへのオマージュが一番多かった。



美術館泥棒？ 泥棒美術館？

Le Voleur du Musee? Le Musee du Voleur?

大学生のときに大英博物館にいて、ものすごいコレクションの質と量に圧倒された思い出があります。

でも知人の一人がすごく怒っていました。あんなにも外国の財宝を略奪して！と。そういう見方もあるなあとちょっと感心したことを覚えています。でも、ここに収蔵されなければこんなにも見事に保存されず、汚損・紛失してしまった可能性も高いことは事実。

ルーブルは大英博物館に勝るとも劣らない世界に冠たる美術館といっても過言ではないでしょう。そのルーブル美術館が9番目の芸術とみとめた漫画の展覧会「Louvre No.9」展を現在、大阪でやっています（1月29日まで）。16人の漫画家にルーブルをテーマに自由に作品を描いてもらうという企画です。

日本の漫画とフランスの漫画（バンド・デシネ）は大雑把にいてエンターテインメントと芸術という違いがあるかも。日本の漫画はまず紙質の悪い雑誌に載って単行本になる。それも数百円で、子どもの小遣い程度で買える。バンド・デシネはいきなり書き下ろし単行本です。A4くらいの大きさと2,000円くらい。大量に読み捨てられる漫画とは少々質が違うものかもしれません。それに一枚一枚の原稿に入る情報量が違う。正直、今回バンドデシネの展示を観るだけではとても理解しきれないと思いました。（どちらも作品の抜粋の原稿が展示されていました）

【ジョジョの奇妙な冒険】で有名な荒木飛呂彦の※『**岸边露伴 ルーヴルへ行く**』も展示されていて、目前で写真を撮って消去させられている人がいました。大人気だな。世界で一番邪悪な黒の絵を岸边露伴がルーヴルに観にくというストーリー。

マリー・アントワネットがダ・ヴィンチのモナリザを見たり、時空を超えてルーブル美術館のコレクションが分解され飛び散ったり、ルーブルでタイムスリップして有名な画家や作家に会ったり、ルーブルにはずっと昔から猫が住んでいたり…と比較的わかりやすいストーリーのなかで、『テルマエ・ロマエ』のヤマザキマリの作品は少し違いました。

シリアのパルミラにいた少年が考古学者にいろいろ教えてもらって、隊商が行き来したむかしの繁栄していたシルクロードの世界を垣間見る。けれど、現在は内戦で、国は荒れ果て考古学者も亡くなり、大人になった少年はルーヴルでパルミラの遺跡に再会する…

故郷のものをフランスで観る…どんな気持ちでしょう。ちょっと考えさせられるストーリーでした。

で、本校にあるBD（バンドデシネ）の作品を読むとちょっと斜に構えているというか、突き放してルーブル美術館を見ている感じです。※『**レヴォリュ美術館の地下**』は専門家が美術館の中に入ってさまざまな資料群調査していくのですが、歴代の専門家のように最後にはその調査の結果を次の専門家に渡す、ちょっと手塚治虫「火の鳥」を連想させるような、悠久の時を感じる作品でした。その中に美術館泥棒/泥棒美術館という一節がでてくるのです。

ルーブルに収蔵されている作品には戦利品、略奪に近い強制買い上げをした作品が少なくない、という批判をしています。その一方で「モナ・リザ」などなんども所蔵作品が盗難の危機にもあっているとも言われています。

おなじく※『**氷河期**』は今より数世紀先の未来。遺伝子操作された犬と人間がルーブル美術館を発掘にやってくる。動物を虐待していた人類へのシニカルな視線が光ります。

どちらも大人向けの漫画といえるでしょう。勢いで早く読み飛ばせる漫画と、考えながらページをめくるBD。どちらもNo.9の芸術です。興味がある方はぜひ大阪に行ってみてください。でも（ここ重要！）展示場のなかにトイレがなく、再入場できないので、トイレに行ってから入場してね。

※参加作品の『**千年の翼、百年の夢**』も本校で所蔵しています。読みたい方はぜひ。

ほかの※の作品も借りられます。



これは松本大洋『ルーヴルの猫』大好きな作品